

## 佳作

### これまでも、この先も。私の宝物

岩手県宮古市立宮古西中学校

3年 及川 実玖

私には大切な宝物がある。中学1年でテニスを始めてから書き続けた「テニスノート」だ。このノートには、日々の部活動や自主練習、練習試合、そして大会本番に学んだことや感じたことを記録し続けてきた。一番最初のページに書いたのは「地区中総体優勝！ 県ベスト16！」大きな目標だった。ページいっぱい力強く書いた。初めてラケットを握った日、グリップの持ち方をノートに書いた。消極的なプレーをした日には、元気な声を出すことから！ 今できること！ パニックになった時には深呼吸。そしてしゃがんで足を動かす。学んだ技術も、一つひとつをすべて記録した。

試合に勝てない日々が続いたある日、父に「反省点だけじゃなくて、良かった所も書いてみたら？」と言われた。なぜ勝てないのか考えた時、自信のなさも大きな要因だと思っていた私は自分を認め、自分の良さを見つめるためにもテニスノートを使うことにした。サーブが良かった。笑顔で試合ができた。苦手なコースで点が取れた。そして、顧問の先生がかけてくれた「私は君たちを信じている」という言葉。それらを記録するたびに、練習したことのひとつひとつが自分の力になっていることを実感でき、壁を乗り越えているのだと、自信になった。練習後は毎日へとへとで、今日くらいはテニスノートを書かなくてもいいかなと思う日もあったけれど、習慣でペンを持ってノートに向かう。そんな日々を経て、あっという間に中3、中学校最後の地区予選を迎えた。中総体は1日目が個人戦、2日目が団体戦。個人戦の前日は気持ちが落ち着かなくてそわそわした。なんとなく手に触れたテニスノートを開くと、「ペアの相手を信じる」と書いたページがあった。彼女は私のペアで、3年間ずっと組んできた。負けた時も、勝った時もずっとペアだった。私は一人で戦っているのではないと改めて心に刻み込んだ。私たちは「今までたくさん負けてきたから、シードじゃないし、誰よりも試合が多いね」そう言って二人で笑って戦った。自信がない時こそ、ラケットの面を上に向ける！ 自分とペアの力を信じる！ 合間合間でノートのページや書かれている言葉が頭に浮かび、ラケットを振り続け、私たちは個人3位で県大会への切符を掴んだ。2日目は、団体戦。個人とは違った緊張感があった。自分のペアだけではなくて、他のチームメート、そしてベンチの外で応援してくれる皆の勝ちたいという気持ちが伝わってくる。1年生の時、自分の学校の試合は終わって解散になったけれど、気になって一

人でフェンスの外で見た決勝戦を思い出した。今の自分と何が違うのかと、ワンプレー、ワンプレーを目に焼き付けるように観戦した。その時の気持ちを「私も決勝戦で自信を持ってプレーしたい」そうノートに書いていた。一戦一戦を勝ち抜いて決勝戦のコートに立った時、そのページが頭に浮かんだ。自信を持って頑張ろう、そうペアに声をかけると「私たちが一番やりたいやり方で戦おう」と答えてくれた。勝利を決めた最後の1点は、何度も何度も壁にぶち当たって、ノートに一番多く反省点を記録してきた私のサーブでの得点だった。こうして私たちは団体戦地区優勝、県大会出場を決めた。私も、ペアも、他のチームメートも泣いていて、フェンスの外で見た、憧れ続けた優勝チームの涙と重なった。

その後、県大会までの1カ月間もテニスノートのページは増え続けた。日々の練習内容をずっと記録し続けたけれど、基礎練習の内容がずっと続いた。自信があってもなくても、基礎に立ち返ることが一番大切なのだと常にノートが語りかけてくる気がした。県大会も1日目が個人戦で、2日目が団体戦。宿泊での参加が決まり、準備をする中、一番最初に手にしたのはやはりテニスノートだった。ここに自分の3年間の全てが詰まっていて、これだけは忘れてはいけないと思った。本番前に急にうまくなれはしない。これまでの力をすべて出し切って、悔いのない2日間にしたかった。そうやってこれまでの歩みをテニスノートで確認し、挑戦した県大会は団体ベスト16の目標を達成できた。ベスト8にも手が届きそうな、悔しい負けだった。自分の弱さも強さも、良い時も悪い時も、全てを知っている私の相棒のテニスノートは、ただずっと寄り添っていてくれたと思う。面倒と感じる日もあったけれど、書くことではっきりと自分のやるべきことが見えた。そしてそこに向かって努力すること。自分の良さを認め、自信につなげていくこと。自分で決めたことを毎日こつこつと継続していくこと。その大切さを教えてくれたし、その過程が形に残っていることは自信につながった。私の宝物はきっとこの先も私の背中を押してくれる「エネルギー」であり続けるだろう。